

World's
Famous
Classics
61

チェーホフ

桜の園

かもめ

かわいい女

А. П. Чехов

ВИШНЕВЫЙ САД

ЧАЙКА

ДАМА С СОБАЧКОЙ
И ДРУГИЕ РАССКАЗЫ

World's
Famous
Classics
61

世界文学全集 II 61

A. П. Чехов

ВШЕНЕБЫІ САД, ЧАЙКА, ДАМА С СОБАЧКОЙ И ДРУГІЕ РАССКАЗЫ

チエーホフ／木村彰一・川端香男里訳

A. Chekhov

桜の園
かもめ
かわいい女
ほか

世界文学全集——61

チェーホフ

1975年10月28日第1刷発行

訳者 木村彰一／川端香男里

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社堅省堂

© KODANSHA 1975 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文3)

目次

たわむれ	木村彰一	5
コーラス・ガール	木村彰一	13
決闘	木村彰一	23
六号室	木村彰一	137
百姓たち	木村彰一	199
かわいい女	木村彰一	235
犬をつれた奥さん	木村彰一	251
谷間	木村彰一	271
かもめ	木村彰一	319
桜の園	川端香男里	385
解説	木村彰一	448
主要作品解題	柳 富子	464
年譜	木村彰一	470

写真撮影 || 木村 浩
装幀 || アド・ファイブ

た
わ
む
れ

木
村
彰
一
訳

訝えわたる冬のまひるとき……寒気がきびしく、ものはぜる音が聞こえる。ぼくの腕にすがったナーデンカは、小鬘こむすの巻き毛も、上唇の上のうぶ毛も、一面に銀色の霜におおわれている。ぼくたちは高い丘の上に立っているのだ。平坦な斜面が足もとから下の平地まで一直線につづき、それが鏡のように太陽を射返している。そばに色あざやかな真紅のラシャを張った一台のソリがおいである。

「下まですべりましようよ、ナーデジダさん！」とぼくはせがむ。「たった一遍だけ！ ぜったい安全です。怪け我がなんかするはずはありませんよ」

だがナーデンカはしりごみしている。小さな自分のオーバーシューズから、氷におおわれた丘のふもとまでの全空間が、底の知れないおそろしい深淵のように見えるのだ。下をのぞきこむだけで、ぼくにソリに乗れとすすめられるだけで、足がすくみ、息がつまりそうになるというのに、その深淵にとびこむなどという冒険をしたらどうなるだろう！ 死ぬか気がちがうかするにきまつている。

「お願いします！」とぼくは言う。「こわがることなんかありませんよ！ こんなことがこわいなんて、それじゃまるで弱虫じゃありませんか、意気地なしじゃありませんか！」

ナーデンカはついに承知する。命がけで承知したことが、顔を見ただけでわかる。ぼくはあおい顔をしてふるえているナーデンカをソリに乗せ、片手で抱きかかえていっしょに深淵の中へ落ちてゆく。

ソリは弾丸のように飛ぶ。たちきられる空気が顔を打ち、ほえたけり、耳もとでうなり声をあげ、怒りのあまりちぎれるほど肌をいためつけ、首を肩からもぎはなそうとする。風が圧迫するので息もつけない。まるで悪魔そのものがぼくたちを両手でひっかかえて、わめきながら地獄へ引きずっていくような気がする。周囲のものが一つに溶けあつてまっしぐらに走り去る一本の長い帯になる……あと一瞬間で、二人とも破滅だ！ という気がする。

「ナージャ、ぼくは、あなたが、好きだ！」小さな声でぼくは言う。

ソリはしだいに速度をゆるめ、風のほえ声やすべり木のきしみももうそれほどおそろしくはなくなり、呼吸もらくになって、ぼくたちはとうとうふもとに着く。ナーデンカは生きた心地もない。まっさおな顔をして、息も

たえだえだ……ぼくは彼女をたすけおこす。

「どんなことがあっても、もう二度とすべらないわ」恐怖にみちた目を大きく見ひらいてぼくを見つめながら彼女は言う。「どんなことがあってもよ！ わたし、死ぬかと思つたわ！」

しばらくすると、彼女は我にかえつて、はやくももの問いたげにじつとぼくの目を見つめる。あの四つの言葉を口にしたのはぼくなのか、それとも風のざわめきの中でそう聞いたような気がしただけなのか？ ぼくはといえば、彼女のそばに立つてたばこを吸いながら、自分の手袋を念入りに点検しているだけだ。

彼女はぼくの腕を取り、ふたりは長いこと丘のふもとを散歩する。彼女ははれいの謎が気になつてしかたがないらしい。あの言葉は言われたのか、言われなかったのか。どっちだろう？ ほんとうにどっちだろう？ これは自尊心の、名譽の、人生の、幸福の問題なのだ。とても大事な問題、この世でいちばん大事な問題なのだ。ナーデンカはもどかしげに、うれわしげに、刺すようなまなざしでぼくの顔をぬすみ見ては、とんちんかんな返事をしながら、ぼくが話を切りだすのを待っている。ああ、愛らしいその顔の、なんという微妙な表情だろう、その微妙なことといったら！ 彼女はあきらかに自分自身とたたかっているのだ。なにか言いたい、なにかききたいと

は思うが、言葉が見つからない。きまりがわるく、そろそろしく、それによろこびが邪魔するからだ……

「あのねえ」ぼくの顔は見ずに彼女は言う。

「なに？」とぼくはきく。

「もう一度……すべりましょうよ」

ぼくたちは階段を上つて丘の上へゆく。またもやぼくはあおい顔をしてふるえているナーデンカをソリに乗せ、またもやふたりはおそろしい深淵をめがけて飛ぶ。またもや風がほえたけり、すべり木がきしむ。ソリがいちばん勢いよく、いちばん大きな音を立てて滑走する瞬間をねらつて、またもやぼくは小さな声で言う。

「ナーデンカ、ぼくは、あなたが、好きだ！」

ソリがとまると、ナーデンカはふたりがすべりおりたばかりの丘を見わたし、それからながいことぼくの顔を見つめ、淡々とした、感動のないぼくの声に聞き入る。

彼女の姿全体が、マフやフードまでが、極度の疑惑の表現と化する。その顔には、こう書かれている。

『あれはなんなのかしら？ あ、言葉はだれが言つたんだろう？ この人かしら、それともただのそら耳だったのかしら？』

こうした不たしかさのために、彼女は気持ちがおちつかず、じれつたい思いをしている。かわいそうに、少女はなにをきかれても答えず、顔をくもらせて、いまにも

泣き出しそうだ。

「そろそろ帰りましょうか？」とぼくがきく。

「わたし……わたしソリすべりが好きになったわ」顔をあからめながら彼女は言う。「もう一度すべりませんか？」

彼女はソリすべりが《好きになった》はずなのに、ソリに乗るときは、前二回と同じように顔がまっさおで、恐怖のあまり息もたえだえにふるえている。

ふたりは三度めの滑走をする。彼女がぼくの顔を見つめ、唇の動きから目をはなさずにいるのがぼくにはわかる。だがぼくは唇にハンカチをあてて咳をし、丘の中腹にさしかかった瞬間をうまくとらえてこう言う。

「ナージャ、ぼくは、あなたが、好きだ！」

こうして謎はいつまでも謎のままだ！ ナーデンカはものも言わずになにか考えている……ぼくはスケート場から家まで彼女をおくつてゆく。彼女はなるべくしずかに歩こうとつとめながら、たえず歩度をゆるめては、ぼくがあの言葉を言いだしはしないかと待っている。ぼくには、彼女のなやみがよくわかる。彼女はけんめいに自分をおさえて、こんなことを言うまいとしているのだ。

「あんなことを風が言うはずはないわ！ それに風にあんなことを言ってほしくはないわ！」

翌日の朝、ぼくは走り書きの手紙を受けとる。「きょうスケート場へいらっしやるのでしたら、わたしを迎え

にいらしてくださいまし。N」この日から、ぼくとナーデンカとは毎日スケート場へかよいはじめる。ソリで滑走するたびに、ぼくはいつも同じ言葉を小さな声で言う。

「ナージャ、ぼくは、あなたが、好きだ！」

やがてナーデンカは、ブドウ酒やモルヒネに慣れるようにこの言葉に慣れてしまう。この言葉なしには生きられないのだ。丘の上からすべりおろるのがこわいのはたしかに前と同じだが、いまではもう、恐怖と危険とが、愛の言葉に、依然として謎のままであり依然として心をなやますあの愛の言葉に、特別の魅力をそえるのだ。うたがわしいのはいつもふたりだけ、ぼくと風とだ……愛の告白者がこのふたりのうちのどちらなのか、彼女にはわからないが、どうやら彼女はもはやどちらでも同じだと思っているらしい。どんな器から飲もうと、酔えさえすればそれでいいのだ。

ある日のまひるとき、ぼくはひとりでスケート場へ行った。人ごみにまぎれこんだぼくが、ふと見ると、ナーデンカが丘の方へ歩いていきながら目でぼくをさがし求めている……やがて彼女はおずおずと階段をのぼっていく……ひとりでソリに乗るのはおそろしい、ああ、なんとおそろしいことだろう！ 彼女は雪のように白い顔をして、ぶるぶるふるえている。歩きつきままるで刑場へでもいくときのようだ。しかしそれでも彼女は断乎とし

て、わき目もふらずに歩いていく。あのすばらしい甘美な言葉が、ぼくのいないときでもきこえるかどうか、とうとうそれをためしてみる決心をしたらしい。見れば彼女はまっさおな顔をして、恐怖のあまり口をあけ、ソリに乗るなり目をつぶって、大地に永遠のわかれを告げて、やがてすべりだす……『ジジジ』……すべり木がきしむ。ナーデンカの耳にあの言葉がきこえているかどうか、ぼくにはわからない……ぼくにはただ、彼女がぐったりと、力なくソリから身をおこすのが見えるだけだ。いや、彼女自身にしても、なにかがきこえたか、それともきこえなかったか、それがわからずにいることは、顔の表情を見ただけでわかる。すべりおりる間、ものの音をきいて、それを区別し、理解する能力を、恐怖がうばってしまったのだ……

だがやがて春の月が、三月がおとずれる……日ざしがやわらいでくる。ぼくたちのスケート場は色が黒ずんで、かがやきを失い、ついに氷が溶けてしまう。ふたりは氷すべりをやめる。かわいそうに、ナーデンカはあの言葉をききにゆく場所もないし、ささやいてやる者もない。風の音はしないし、ぼくはやがてペテルブルクへ行くからだ——すぐには帰るまい、いやおそらくは行きつきりになってしまっただろう。

出発の二日ほど前の、とあるたそがれどき。ぼくは小

さな庭にすわっている。ナーデンカの住んでいる家とこの庭とは、釘をうちつけた高い塀で仕切られている……まだかなり寒く、厩肥の下にはまだ雪も残っている、木々も生気がないが、あたりには早くも春の香がただよい、ミヤマガラスがねぐらにつきながらさわがしく鳴きかわしている。ぼくは塀のそばへ行つて、ながいことふし穴からのぞく。ナーデンカが表階段の上に出てきて、あこがれにみちた悲しげなまなざしを空に注いでいるのが見える……春の風が青ざめたものうげな顔にまともに吹きつける……その風は彼女に、れいの四つの言葉をきいたあのととき、丘の上でうなっていた風のことを思い出させる。彼女の顔は世にもうれわしげな表情になり、涙が一滴、頬をつたって流れ落ちる……かわいそうな少女は、その風にもう一度あの言葉をはこんできてとたのむかのように両手をさし出す。で、ぼくはうまく風をとらえて、小さな声で言う。

「ナージャ、ぼくは、あなたが、好きだ！」

ああ、ナーデンカのよろこびようといったら！ 彼女は叫び声をあげて、顔いっぱい微笑をうかべて、うれしそうな、幸福そうな、とてもうつくしい姿で、風にむかって両手をさしのべる。

わたしは荷づくりをしにいく……

これはもう、ずいぶん昔の話だ。ナーデンカはいまは

もう人妻だ。親に言われて嫁に行ったのか、それとも自分の意志で行ったのか、——そんなことはどうでもいいが、とにかく貴族後見院の書記と結婚して、いまではもう子供が三人ある。いつかふたりでスケート場に行ったことや、風が「ナージャ、ぼくは、あなたが、好きだ」という言葉をはこんできてくれたことは、いまだに忘れていない。いまとなつては、これこそ彼女の生涯でいちばん幸福な、いちばん感動的な、すばらしい思い出なのだ……

それにしても、年をとってしまったいま、自分がなぜあんな言葉を口にしたのか、なんのためにあんなたわむれをしたのか、ぼくにはもうわからない……

コーラス・ガール

木村彰一訳

ある日、彼女がまだ若くて、きれいで、声もよかったころのこと、彼女の別荘の中二階に、ひいき客のニコライ・ペトローヴィチ・コルパコフがすわっていた。がまんできないほど暑くて、息苦しかった。コルパコフはたっただいま食事をして、安物のポートワインを一本あけたばかりだったので、なんとなく憂うつで、気分がすぐれなかった。ふたりは退屈して、散歩に出るために暑さのやわらぐのを待っていた。

突然、思いもかけず、玄関のベルが鳴った。フロツクをぬいで、スリッパをはいたコルパコフは、さつと立ち上がって、げげんそうにパーシャの顔を見た。

「きつと郵便屋さんよ。でなきや、わたしのお友だちかもしれないわ」歌姫は言った。

コルパコフはパーシャの友だちや郵便配達になら、見つかつてもべつにどうということはなかったが、とにかく念のために自分の服一式を両手にかかえてとなりの部屋へ行き、パーシャは急いで戸をあけにいった。ところが、なんとも驚いたことに、戸口に立っていたのは、郵便配達でも友だちでもなく、どこかの見知らぬ婦人、

しかも若くてうつくしい、りっぱな身なりの、どうみても相当身分のある婦人だった。

見知らぬ婦人は顔をまっさおにして、まるで高い階段でもあがってきたように苦しそうな息づかいをしていた。

「なにかご用でございますか？」パーシャはきいた。

婦人はすぐには答えなかった。足を一步踏み出して、おもむろに部屋の中を見まわしたが、疲れたのか、それとも気分でもわるいのか、とても立つてはいられないという様子で、そのまま腰をおろしてしまった。それから長い間、しきりになにか言い出そうとつとめながら、血の気のない唇をふるわせていた。

「うちの主人が来ておりますでしょうか？」まぶたを赤く泣きはらした大きな目でパーシャを見あげて、彼女はとうとうそうきいた。

「ご主人ですって？」パーシャはささやくように言った。そして急に手足がつめたくなるような驚愕におそわれた。「ご主人ですって？」彼女はふるえながらくりかえした。

「うちの主人……ニコライ・ペトローヴィチ・コルパコフですわ」

「い、いいえ、奥さま……わたし……どちらのご主人も存じあげませんわ」

一分ほど沈黙のうちに過ぎた。見知らぬ婦人は青ざめた唇をハンカチで二、三度ふいて、心のおのきをおさえるために、じつと息を殺していたし、パーシャはその前に棒のように立ちすくんだまま、当惑と恐怖の面持ちで彼女を見つめていた。

「すると主人は来ていないとおっしゃるのね？」婦人はこんどはしっかりと声を出して、なにか得体の知れないほえみをうかべながらきいた。

「わたし……わかりませんわ、どなたのことをおっしゃるのか」

「あなたって、いやらしい、卑怯な、見さげはてた女ね……」見知らぬ婦人はさもにくらしそうに、軽蔑をこめてパーシャをながめまわしながらつぶやいた。「ええ、そうよ……いやらしい女だわ。わたし、とうとうあなたにこう言ってやることができて、こんなうれしいことはないわ！」

パーシャは、怒りに燃えた目と白いほっそりした指を持ったこの黒い服の婦人に対して、自分がなにかいやらしい、醜悪な人間だという印象を与えたことを感じて、自分のぼつてりふくらんだ紅い頬や、鼻のアバタや、どうしても上へ梳き上げることのできない額ぎわの垂れ髪などがはずかしくなってきた。そして、自分がもっとやせていたら、白粉も塗っていず垂れ髪もなかったら、身

分のひくいこともかくせたらうし、この見知らぬ神秘的な婦人に対してこれほど恐怖を感じたり、はずかしいと思ったりすることもなかったらうに、と思った。

「うちの主人はどこにいますの？」と婦人は言葉をつづけた。「もっとも、あの人がここにいないといまいと、わたしにはどうでもいいことですけど、でもどうしてもあなたのお耳に入れておかなきゃならないのは、お金の使いこみがばれて、コルバコーフは行くえをさがされてる、つてことですよ……あの人は逮捕されかかっているんですの。こうなったのもみんなあなたのおかげですけどね！」

婦人は立ちあがって、ひどく興奮して部屋の中を歩きまわった。パーシャはそれを見ていたが、あまりのおそろしさにことの次第がさっぱり呑みこめなかった。

「あの人、きょうにも見つかって、逮捕されるでしょう」婦人はそう言っしてしゃくり上げた。その泣き声にはさげすみとうらめしさのひびきがあった。「あの人にそんな大それたことをさせたのがだれだか、わたしにはちゃんとわかつているんですからね！　なんていやらしい性わる女だろう！　なんてけがらわしい悪女だろう！（婦人は見るもけがらわしいといわんばかりに唇をゆがめ、鼻にしわをよせた。）わたしは弱い女よ……いいこと、下種女！　……わたしは弱い女よ。あなたはわたし